



もみじ

第10号

【ホームページ】<http://akihaku-dai1.city-niigata.ed.jp>



～一幼のシンボル もみじ～

もみじ組研究保育を通して

11月17日、年長もみじ組の研究保育でした。ちょうど12月初めの生活発表会に向かっていく過程の子どもたちの様子を公開しました。

保育のねらいは「友達と、劇遊びの役の表現やお話の面白い場面について考え合い、思いついたことをやってみる」です。子どもたちが散歩に出かけたときに見つけたカナヘビのかんちゃんを読み聞かせで気に入っていた『さんまいのおふだ』のお話が結びつくような？つかないような？？？。子どもたちはカナヘビのかんちゃんを追って食べようとする山姥をやっつけるために、大きな穴を掘って落とし穴を作ること考えました。

朝から、落とし穴のつもりで大きな紙に丸型を描いた子どもがいました。もみじ組さん5人が入れるくらいの段ボールを落とし穴に見立て、そこに落ちるということを実現しようとしていました。

A案「段ボールの上に穴を描いた紙を張るのはどう？」→紙の穴に飛び込んだら一回で切れて使えなくなる。B案「段ボールを横にして落とし穴の紙を張ればいいよ。」→提案した子どもがやってみたら、下から足が見えてしまい、みんながやりたいことと少し違う。C案「段ボールを丸くして穴にすればいいよ。」→四角い段ボールを丸くするためには、まず段ボールを切ろう。と、子どもたちから考えが出てきました。

子どもたちはC案をやってみることにしました。段ボールの一角を切り筒状にしました。そのわきに落とし穴に飛び降りるための巧技台を置き、落とし穴の中には小型のマットを積み重ねました。「ひゃ～」と声を出しながら落とし穴に落ちる振りを順番にやってみる子どもたちでした。

担任は、子どもの声に共感的に耳を傾けることを大切にしています。そして、保育には常に子どもと担任、子どもと子ども、担任とクラスの子どもの全員の対話が生まれます。その対話から自分たちがやりたいことに向かっていく年長らしい姿がありました。担任は、保育の流れに都合のよい声だけではなく、声にならない子どもの声、時に突拍子もない声も、保育の中に正に位置づけて対応していくという責任があります。

3年間、子どもたちが幼稚園で暮らす中で、様々な出来事を子ども自身が自分事として自覚し、決めてやってみる過程に、私たちがどれだけ出会わせることができるか。子どもが豊かな体験を積み重ね、心を育む保育を日々実践できるよう努めています。



この段ボールを落とし穴にしよう



どうやったら落ちるように見えるかな



描いた穴を横に張ってみる？



ここで穴を掘っているつもりね



落とし穴の中にマットを重ねよう